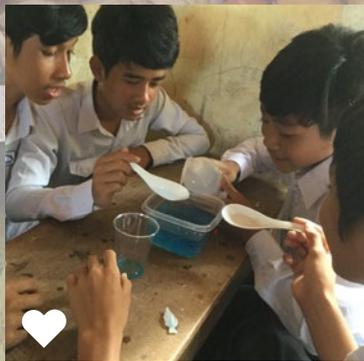


舞台は世界だ!

Go! Global

KANTO GAKUIN MUTSUURA JUNIOR&SENIOR HIGH SCHOOL



What is

Service Learning?

2018 KGM
グローバル人材
育成プログラム
レポート Vol.15



ますます進むグローバル化は、加速するボーダーレス化とも言えます。中高一貫校での6年間は、入学から10年後、さらには20年後の社会を見据えて準備する大切な時と場です。ボーダーレスに向かう社会を早期に意識し体験する学習環境づくり。関東学院六浦は60周年を迎えた今、「若く純粋な想いを道へ.....将来を世界に繋ぐこと」が新たな使命と考えています。

「必要とされる実感」～5回目のカンボジア研修～

5年 小泉 雄一郎

カンボジア サービス・ラーニング研修が始まって5年目になります。

私は、中学1年の頃から毎年この研修に参加していますが、毎年のように変化するカンボジアのインフラ整備と経済発展には驚かされます。中学1年で初めて参加した時には、道路は舗装されてなく、雨が降ると冠水して通行止めになるような場所だったところもきれいに舗装され、電力が不安定で寄贈した扇風機が使えないような状況だった小学校でも昨年寄贈したパソコンが活用されプリントを作成するなど、近代化の勢いは目覚ましいものがあります。

今年の研修で最も大きな変化として感じたのは、訪問する中で最も貧困層が多い地区である『PHNOM DA 遺跡近くの子どもたち』の変化です。昨年までの PHNOM DA 遺跡の子ども達は、私たちの船が到着すると子ども達がたくさん集まっていました。その中には靴を履いていない子や服を着ていない子などが来てくれましたが、今年はその状況が大きく変わっていたのです。PHNOM DA 遺跡の

近くに着き場に到着しても子ども達が断然に少なく、10人程度の子たちしかいません。「今までは、30人以上の子どもたちがいて、プレゼントを渡せる子を選ばなければならない状況だったのに…」と少しさみしさを感じていたのですが、現地のスタッフの先生から「この地域にも学校が出来たので、学校に通うことができる子どもが増えたから、集まれる子どもの数が減った。」という話を伺いました。一瞬「プレゼントを沢山持って来たのに…」という複雑な思いを抱きましたが「これは子どもたちにとっては良いことなんだ」と自分の考えを改め、素直に喜ぶことにしました。

PHNOM DA 遺跡まではいつも現地の子どもたちと登るのですが、その中に去年一緒に遊び写真を撮った子どもがいました。去年の写真を見せるとお互い言葉のわからない状態でのゼスチャーによるコミュニケーションで何となくつながることが出来ました。不思議な嬉しさと感動に包まれた感じがしました。

私は5年間カンボジア サービス・ラーニ

ング研修に参加させて頂きましたが、毎年変化していくカンボジアを見ることができ、新しいことに気づかされます。また、「カンボジアの人たちの為に自分自身何が出来るか」という思いで活動することは、自分自身が「人の役に立っており、必要とされている」ということを実感し、それはまさに将来を考える上で、とてもいい経験になっていると感じます。

来年は進路決定という大きな課題はありますが、出来ることなら来年もこの『学びの多い研修』に参加して、これからの成長につなげたいと考えています。



2014年 1年



2018年 5年

カンボジアサービス・ラーニング研修プログラム

1 事前学習

出発まで17回の『集い』を実施しました。今年の目標は話し合いの末、「文化の理解と交流を通じ、他者理解を深めることで自己を見つめなおそう。安全に配慮し、サービス・ラーニングの意味を理解しながら積極的に行動しよう。」に決定しました。『集い』では、研修授業の準備、募金・献品活動の計画と実施など、カンボジアの子どもたちの為にそれぞれの時間を捧げました。

出発前日の結団式では、宗教主任からお祈りしていただきました。学校の代表として皆さんからお預かりした品を心を込めて届けようと改めて決心しました。



2 現地にて

いつもとは違う「教える側」として教室に入り、「言葉がわからない。準備したことが上手く出来るか」などプレッシャーで足が震える緊張感を味わいながらスタートしました。言葉が通じない中で必死に伝え、「わかった」と言わんばかりの笑顔と仕草をもらった時はとてもうれしくなりました。

運動会では、デモンストレーションを担当するなど運営を担いました。各種目一等賞の景品は油や小麦粉などの日用品です。景品をもらうために必死に頑張っている姿と同時に、負けると分かたら途中でやめてしまう姿が印象に残りました。

カンボジアの歴史を学ぶため、カンボジアの子どもたちと一緒にトゥール・スレン虐殺犯罪博物館にも行きました。元高校の校舎だった建物の中で、拷問^{きょうもん}と殺戮^{ころりく}が繰り返された当時の写真や拷問の器具が展示されていました。今思い出だけでも苦しい気持ちになるような場所ですが、現地ではあまりこのことを知らされていない現状もあるようです。この場所を現地の子どもたちと一緒に回れたことは、「平和と教育の大切さ」を考える上でとても大切な経験だったと思います。

3 事後学習

帰国後、「感想文報告会と座談会」を実施しました。

今回の研修に参加して、『カンボジアの子どもたちから学んだ』という生徒たちの中に、『サービス・ラーニング研修に参加した先輩方や仲間から多くの事を学んだ』という感想も多くあり、現地での研修が有意義であったと感じました。

さらに『学校内でも仲間として協力し合おう』という声も聞かれ、『サービス体験を通して人間として成長し、社会的責任感が強くなる』という教育効果の一片を見出した気がしました。

今後は、学習発表会・入試広報活動へのお手伝い・来年の六浦祭展示発表に向けて、活動を継続していきます。



サービス・ラーニングって何？

サービス・ラーニングという教育手法は、アメリカで誕生しました。それは“体験を通して獲得する学びにこそ真の教育がある”という「行動による学習論」を展開・実践したとされています。この活動は、『参加者自身がサービス体験を通して人間として成長し、社会的責任感が強くなる』という教育効果があるとされ、社会的なコンセンサスも次第に形成されていきました。

日本では、「ボランティア活動の教育的効果の認識」は学問外の能力を補足的に開発する手法として認知されています。しかしながら、サービス・ラーニングは単なるボランティア活動とは違い、活動体験が終われば完結するものではありません。活動のあとに「振り返り」という作業が組み込まれ、自分の体験から学びを引き出し、自らをエンパワーメントするような教育手法のことです。



本校におけるカンボジア サービス・ラーニング研修を推し進める背景

本校には、「人になれ奉仕せよ」という校訓があり、この校訓を教育の基盤に据えています。現在の日本の教育においてもこの校訓が示すような「人格教育」の重要性は、グローバル化・IT化が益々進んでいく現代社会においても変化はみられず、キリスト教に基づいた教育を実践している本校においては、失ってはならない大切なものと位置付けています。



本校におけるカンボジア サービス・ラーニング研修の始まり

本校においては、2014年度からこの研修をスタートしています。多くの大学で実践されているものの「高校生ではあまり例のない」この活動を継続しているのは、先に記したサービス・ラーニング教育理論に賛同していることは勿論のこと、この活動に関わった多くの生徒が「サービス・ラーニング」という「行動による学習」によって多くの「学び」と「気づき」を得て、自分自身の将来を見据える上でも「かけがえのない経験を得ている」という実感があるからです。



本校におけるカンボジア サービス・ラーニング研修への取り組み

本校における「カンボジア サービス・ラーニング」は今年度で5回目の実施となり、延べ50名の生徒が参加しています。その中には、初回からリピーターとして毎年参加している生徒もいます。(今年5年生になりました) その生徒の軌跡をたどることで、「サービス・ラーニング」の教育効果のすべてを計り知ることはできませんが、サービス・ラーニングに参加した後輩たちが、彼の背中を見て行動の模範とし「あのような人物になりたい」と憧れて自身の行動を決めている姿勢には、サービス・ラーニングのもつ『参加者自身がサービス体験を通して人間として成長し、社会的責任感が強くなる』という教育効果を見出すことができます。

勿論、この研修に参加するにあたって「どの年齢が最も適性が高いのか」については、今後の調査に期待されますが、毎年同じプログラムに参加していても「毎年新しい気づき」を得て成長していく姿を見ると、この「サービス・ラーニング」というプログラムは、思春期の只中にある中高生期においても極めて有意義であり、同時に魅力を感じるものに

なっています。



カンボジアの歴史から平和について学ぶ

本校のカンボジア サービス・ラーニング研修が他のサービス・ラーニングと大きく異なるのは、サービス・ラーニングを学ぶと同時に、カンボジアの歴史をひも解くことから平和の尊さ、教育の重要性を学ぶ機会が得られることです。

現代史において、人類はいくつかの残忍な大虐殺を起こしました。その中には、ナチスドイツがユダヤ人に対して行ったホロコースト、アフリカのルワンダ大虐殺などがあります。カンボジアでは、1975年～1979年までカンボジアを支配した共産党政権クメールルージュの指導者(ポル・ポト)の下、推定150万人～200万人の人が虐殺されました。

本校では、拷問と大量虐殺の地となったトゥール・スレン虐殺犯罪博物館とキリングフィールドを現地の子どもたちを招待して一緒に見学します。(多くの現地の子どもたちは、過去にそのような大虐殺があったことをあまり認識していない現状があるため)目を塞ぎたくないようなおぞましい写真や実際に使われていた拷問の器具の数々、多くの人骨を目の当たりにすることで、平和について自分自身の心で考え、教育の重要性についても改めて考える機会にしたいと願っています。



アフリカでのボランティア活動に参加して

4年 ボンド・レベッカ・アンヌ

AFRICA



だの穴でした。

ウガンダでは、医療をメインとしたボランティア活動をしました。ウガンダで出会った子供たちは靴をはいたことがほとんどなく、裸足で学校まで通っていました。そのため、子供たちの足の裏には寄生虫が付着しているのです。私たちは、土の付着した彼らの足を洗って汚れを落とし寄生虫を取り除きました。この作業は刃物を使うので、専門的な知識を持っている人が行いました。その後で、足を消毒します。寄生虫を取り出した場所から菌が入らないようにするため、血を拭き取ってから消毒し、ガーゼで足を巻きました。そして私たちが持ってきた靴をプレゼントしました。これは、彼らの足に新たな虫が寄生しないためのものです。靴の他にも、服や靴下、シャツなどもプレゼントしました。

最後に、スワジランドの学校では時間に余裕があったため、子供たちと一緒に遊びました。子供たちは興味津々で、「どこから来たの?」、「何の教科が一番好き?」、「スワジランドをどう思う?」、などたくさん質問をしてくれました。他にも、一緒に写真を撮ったり、踊ったり、バレーボールをしたりと、とても楽しかったです。

今回のアフリカでの滞在を通じて、私は日本での生活が如何に恵まれているかを実感しました。日本では学校に行けない子はほとんどいません。また、日本ではどこでも水道水をそのまま飲むことができます。日本のトイレには、「瞬間暖房便座」や「夜間ライト」、「オート開閉」など、豊富な機能がそろっています。環境に恵まれることはありがたいことですが、あまりにもその環境に慣れすぎて、それがどれほど価値のあるものなのか



を忘れてしまうこともあります。例えば、「学校なんてだるい」と言ったり、必要以上に食べ物を注文し残してしまう人がいます。アフリカでの経験を通じて、私は、こうした状況がいかにも恵まれた状況なのか考えざるを得ませんでした。また、もう一つ学んだことは、「環境的に恵まれたこと=幸せ」とは必ずしも言えないことです。人によって幸せの基準は違います。アフリカで出会った人たちは、日本に比べれば物質的には恵まれていないかもしれませんが、今ある生活を楽しみとても幸せそうでした。自分にとっては見慣れぬ生活であったとしても、世界中には様々な生活スタイルがあり、そうした多様性について学ぶことの重要性を私はアフリカで滞在を通じて知りました。今回の滞在は、私にとってさまざまな意味で貴重な機会となりました。



私は、2018年10月6日から10月27日までの3週間、アフリカ大陸にあるエチオピア、ウガンダ、スワジランドで教育と医療的な面でボランティア活動に参加しました。

まず、エチオピアで教育支援活動に参加しました。私のグループは、「色の見え方」について10分程度英語で授業をしました。アフリカの学校では、私たちが行った授業の内容について必ずしも十分に学んでいるわけではなかったので、とても熱心に話を聞き、そして、とても積極的に授業に参加してくれました。その後、このアフリカ訪問を主催した団体が支援している3人の女の子の家を訪問しました。3人共、家の広さは8畳程で、洗濯をする際には、川から自分で運んできた水で洗っていました。川から水を運んでくるのも一苦勞です。トイレには便座などはなくた

校長先生のメッセージ

インターネットにアクセスさえできれば、複雑な知識や情報までも得られる時代。ICTとAI、そして5Gが発達する社会に向け、学びと学び方が変わらざるを得ません。知識を詰め込むだけの学習が求められるのではなく、その知識が在る領域と概略を認識する力、それらをクリティカルに整理する力、活用する力の習得が求められます。そしてグローバル化で、未知のものや違うもの、自らの課題に「気づく」経験をすることがますます重要になります。日常の見慣れた景色ではない空間での「気づき」の経験を、今度は慣れ親しんだ日常の中に戻して「課題を発見する力」に育てる。このプロセスを六浦中・高は大切にしています。Go! Globalはプロセス。六浦の教育の特色です。

(黒畑勝男 2014年入職就任)

最新情報はここから



学校公式サイト
<https://www.kgm.ed.jp/>



Instagram

https://www.instagram.com/kanto_gakuin_mutsuura/



facebook

<https://www.facebook.com/kantogakuinmutsuura.jsh/>

